

ビッグデータの分析による情報活用手法

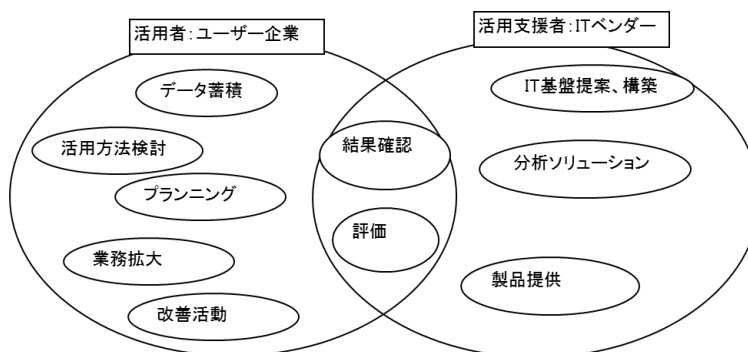
ビッグデータ活用モデルの研究 —星座の見つけ方教えます—

アブストラクト

1. 研究の背景/問題・課題

昨今、情報技術分野という銀河に無数に点在する星のごとくビッグデータが輝きを増している。ユーザー企業はその星を有効に使いビジネスに展開していきたいと考えている。しかしながら、それら进行分析・活用していくノウハウは、分析専門のコンサルタントや分析パッケージの IT ベンダーが保有している。活用者がビッグデータ活用を含むビジネスを始めるためには、ビッグデータを分析・活用していくための考え方やアプローチを理解し、実践していく必要がある。本分科会は富士通などの IT ベンダーを「活用支援者」と呼ぶこととし、データ活用によって新規事業の確立や既存事業の改善を目指すユーザー企業を「活用者」と呼ぶことにした（図表 1）。そして、この「活用者」がビッグデータを分析・活用していくための考え方やアプローチを研究する事とした。

図表 1. 活用者と活用支援者



2. 研究のアプローチ

まず、参加メンバーの「ビッグデータ」についての知識レベルを統一させるために、まずは「過去事例」、「最新テクノロジー」そして「分析手法」について実態調査を行った。そして、富士通でデータ活用のノウハウを有する「キュレーター」を中心にキーマンとなる「人材」について研究する事とした。そして、最終的に活用者側のキーマンに必要なスキル、推進プロセスについて研究した。

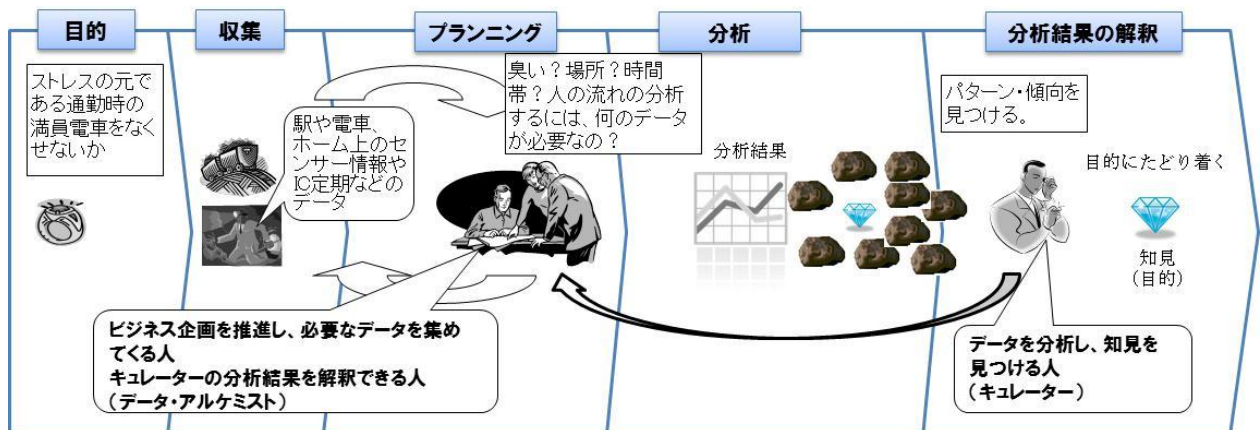
3. 研究内容/研究成果

1つ目の実態調査では、過去の事例からデータ活用のイメージをしやすい事、分析手法は習得が困難だが、基本的なプロセスは理解しやすい事が分かった。そして分析のアプローチ方法として「データ主導型」と「目的主導型」の二つのアプローチがある事が分かった。実態調査の結果については初心者用のガイドラインとしてまとめた。

2つ目のキュレーター研究では、複数のケーススタディの創出と、メンバーに対する内部アンケート、および実際に活躍しているキュレーターに対するインタビューを行い、キュレーターに求められるスキルや人材を明らかにした。この結果、キュレーターは活用支援者側の人材であり、活用者側には別のキーマンとなる人材が必要である事が分かり、この人材の事を本分科会は「データ・アルケミスト」と命

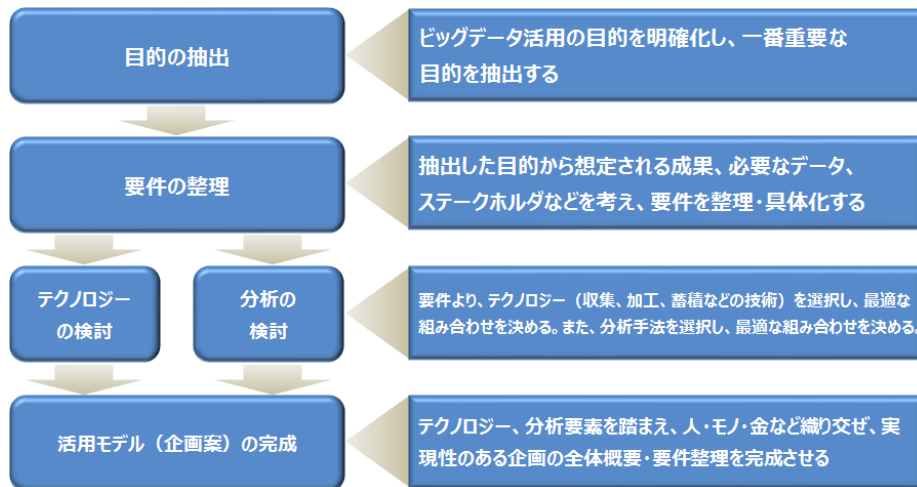
名する事とした（図表 2）。そして新たに研究対象をキュレーターからデータ・アルケミストに設定し直すこととした。

図表 2. データ・アルケミストの位置付け



3つ目のデータ・アルケミスト研究では、ケーススタディを分析・検討することにより効率的なデータ活用プロセスを考案する事が出来た（図表 3）。このプロセスは「目的主導型」分析を行い、モデルを具体化した上でテクノロジーや分析を行う事で、効率的なデータ活用を行う事ができる。また、これらのプロセスを活用者が実践できるように、具体的な手法やフレームワークをガイドラインとしてまとめた。そして最後に、分科会メンバーでこのガイドラインの有効性についての検証を行った。その結果、ガイドラインに一定の評価を得る事が出来た。

図表 3. ビッグデータ活用プロセスの全体像



4. 研究の総括と提言

今回の研究により、ビッグデータ活用の為に活用者側でおさえるべき知識、人材、プロセスを明確にすることができた。更にツールやガイドラインを用意し、その有効性についても検証する事が出来た。この研究成果は活用者だけでなく、活用支援者にとっても、活用者側に求めるべき作業を明確する事ができ、有効であると考えられる。また合わせてビッグデータ活用の入門書も作成した。これは現在市場には出回っておらず本研究書を読む補足資料としてだけではなく、汎用的なガイドとしてお使いいただけるだろう。

当分科会の研究成果が、リスクを含んだビッグデータビジネスへの参入を躊躇されている企業にとって、少しでも壁を低くすることに繋がれば幸いである。